



長期経過からインプラント治療を探る —長期症例からインプラント周囲骨の変化を探る—

東北・北海道支部

中里 滋樹

1989年日本で病院歯科としては最初と言われているチタンのインプラント手術を岩手県立中央病院歯科口腔外科で開始し、その後開業した年数も含め32年経過するなかインプラントの長期安定症例も散見するようになってきました。

特にインプラント長期症例の口腔内を臨床的に観察しますと、自分の残存歯が喪失してもインプラント体は長期にわたり残存する症例も散見されます。

文献的には骨結合したインプラント体に荷重を加えますと、インプラント周囲の骨はオッセオインテグレーションの亢進とともにインプラント周囲の骨細胞は有意に増加し、コラーゲン繊維と生体アパタイト結晶の優位性配向が起こり、骨質を著しく変化させ、骨質、骨密度の増大が起こる事が報告されております。

そこで今回下顎骨腫瘍切除後に腸骨移植による顎骨再建症例にインプラント治療を応用し、20年から30年にわたり安定した経過をたどる3症例を中心にインプラント周囲の移植骨である腸骨の骨質は長期的にどのような変化が起きているか、今回レントゲン、CTにて検討しましたので文献的考察も加えながら発表したいと思います。

【略 歴】

- 1974年 岩手医科大学歯学部卒
岩手医科大学歯学部第一口腔外科学講座入局
- 1982年 岩手県立中央病院歯科口腔外科長
- 1991年 岩手医科大学医学部麻酔学講座より医学博士取得
- 2004年 なかさと歯科医院開設
- 2012年 岩手医科大学歯学部臨床教授

【学会活動】

- 日本顎顔面インプラント学会指導医、日本口腔外科学会指導医
- 日本歯科麻酔学会認定医